

---

# 私がDJになる時

雅治

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私がDになる時

### 【ZPDF】

N1190D

### 【作者名】

雅治

### 【あらすじ】

いじめられて、登校拒否になっていた中2の女の子が、ある出来事をきっかけに、いろいろなことを学んで、眞の自分になっていく

。

## CAST (前書き)

このお話は、いじめと長崎の原爆投下について考えると重い小説です。  
この小説が、いじめや病と戦う人たちの励みになってくれれば光榮です。

## CAST

登場人物  
四王寺 えぼし  
鹿島石塚 いしづか  
飛鳥赤司 あすかあかし  
永星 えいせい  
五十嵐 いがらし  
鐘ヶ江 かねがえじゅん  
岡本 おかもと  
鐘ヶ江 かねがえじゅん  
黒沢 くろさわ  
坂小条 こじょう  
坂近藤 さかもととう  
坂西本 さかにしほん  
坂新宮 しんぐう  
坂仁和寺 じんわくじ  
坂大名 だいみょう  
坂古川 ふるかわ  
坂月 つき  
坂平原 ひらはら  
坂古川 ふるかわ  
坂月 つき  
坂向 ひゅうが  
坂向 ひゅうが  
坂格 ひいらぎ  
坂仁和寺 じんわくじ  
坂翼 ひいらぎつばさ  
坂律 りつ  
坂杏 あづ  
坂亮 あづま  
坂知 ち  
坂津 つま  
坂磨 ま  
坂嶽 がく  
坂賭 がくと  
坂雅 まさたか  
坂貴 まさたか  
元青龍 げんきゅう  
元元氣 げんき  
元彰 あきら  
元風吹 ふぶき  
元弘樹 ひろき  
元都果紗 つかさう  
元隆 じゅう  
元撥春 はつはる  
元翔 じゅうしょう  
元卓 たく  
元直人 なおと  
元厘雄 りゆう  
元理乃 りのあ  
元一亜 かずひと  
元人 ひと  
元優輝 ゆうき  
元優 ゆう  
元賢 けん  
元和 やまと  
元優 ゆう  
元輝 ひく  
登場人物  
宝珠 ほうじゅ

## 序章・誓い（前書き）

この章は、まだ序章ですが、必ず読んでもらいたい章ですー。

### 序章・誓い

私は、一人の男性にこれから的人生を180度変えられました。この男性と出会つていなかつたら、私は自分を失つて、自殺していたかもしれません。

そんな命の恩人…いえ、人生の師匠と言つても過言ではないこの人に、私はどうやつて恩返しをすれば良いのか分かりません。その人が最後に残してくださつたモノは、とても大きくて、温かいモノでした。

その人は、あつたその時から私のことを理解してくれました。いじめの辛さ、心に負つた傷の痛み、そして悲しみも…。だから私は今ここに生きることが出来ています…。私は、その人こそ、限りなく神様に近い人だと思います。

今はもうこの世にいないその人に対し、今から私が出来ること…。それは、自分として自分らしく、強く生きること…。そして、あの人から託された全てのものを全うする事…。それだけなのかもしれません。だから私は生きようと思います。

精一杯…まだ、到着場所は決まってないけど…。振り向かないで、立ち止まらないで、寄り道しないで、自分を信じて進んで行こうと思います。

だから…もう一度…もう一度だけチャンスをください。

私、四王寺宝珠は、あなたの意志を引き継ぎ、ロコウキとして生

きています。

そして、いじめや病で苦しむ人たちに、優輝と希望の光を与えられるような音楽を奏で続けることを誓います。

私は誓います。

私はもう泣かない。。

絶対負けない！！

## 序章・誓い（後書き）

次章からはいよいよ本編に入ります。  
主人公が、主人公の人生を大きく変えるあの人に会う一番最初のきっかけに遭遇するシーンです。  
お楽しみに！

## 第一章・止まらない涙…（前書き）

いよいよ本編に入ります。  
主人公はいじめを受けているようだ…。

## 第1章・止まらない涙…

「あんたさあ、ホントウザいんだけど。わざわざ死んじゃえばあ？」

「キモーイ。近寄るなつつの…キモ菌がうついたらビーしてくれるワケえ？」

「うう言つ事言われるのは、もう当たり前…。

物を隠されたり、落書きされたり、足を引っ掛けられたり…。

私は所謂『いじめ』に遭つていた。

そして何時の頃からか、私はもう学校に行かなくなつていた…。

私は今、公園をぐるぐると、唯、只管走つていた。

何で私が…何で私だけ…何で私ばかり…こんな事されんといかんとよ…！！

1週2kmの公園を、悲しみ、怒り、憎しみを込めて走る。そうすることで、決して癒えない心の傷口を、無理矢理締めようと/or>していた。

そんなことしても何も変わらないことぐらう分かつていた。でも私にはどうすることも出来ないから…。

こうするしかなかつた。

何周目か分からなくなつてきた頃、ベンチに座つて楽しそうに話している、私ぐらいの男の子と女の子は田に入つた。

「それってアレやん！うわー。絶対有り得なかるー？」

「ホントだつてえ！…マジびっくりしたつちやもん…！」

良いなあ…、私もあんな風に友達と話したりしたいなあ…。

そう思いながら立ち止まって、その一人を見つめていたら、学校での出来事が蘇ってきた。

「ねえ、見て。まだ来たわよ。」

「よく来れるよねえ。ホントバツカじやないの？」

「あははは。アンタがいなくなつたつて、誰も悲しまないって。だから安心して死んでいいからねー。」

そしたら、その二人までが、私の噂をしながら笑っているような感覚に襲われて、恐くなつて、私はその場から早く離れようとした足を動かし始めた。

でも、パニックになつた私は、足が縛れて、その場に転んでしまつた。

「いっ、痛つあ…。」

私のその声に、その一人が私の方を見た。

卓：「おいおい、大丈夫かあ？」

やだ…来ないで…。

厘雄：「大丈夫？立てる？？」

誰か助けて…！

二人は私のことを心配してくれてるんだ。

でも、今の私には、そんなふうには見えていない。

女の子が手を差し延べてくれた。

けど、私には、刃物を持った、あのクラスメートに見えてしまつて、遂に叫んでしまつた。

宝珠：「やあつ…！来ないでえ…！ほつといてつ…！…もう閑わらんでえ…！」

すると男の子が、私の肩を揺すつてこう言つた。

卓：「ほつとける訳無いやうが！！自分の目の前で人が血い流して倒れるとやぞ！！ほつとく人間が何処にあるとかちや！！」

そう言われて、私が顔を上げると、今度ははっきり一人の顔が見えた。

宝珠：「ごめんなさい…。私…。」

涙が止まらない…。

こんな私にでも、優しく接してくれる人が、家族以外にもいたなんて…。

そう思つたら、嬉しくて涙が止まらなかつた。

## 第1章・止まらない涙・（後書き）

次章は、しばらく味わう」との出来なかつた温かさを主人公は手に入れます。

次章もお楽しみに！

## 第2章・温かさ…。（前書き）

主人公が、過度のいじめによって失っていたものを取り戻します！

## 第2章・温かさ…。

### 第2章・温かさ…。

厘雄：「あーあ。泣いちゃったあ。卓のせいだよお。あんな言い方  
しなくても良いのにさあ。可哀想じやんかあーー！」

泣いている私を見て、女の子が男の子に言った。

卓：「はあっ！？俺かよつー！？って、俺しかおらんよな。悪い！俺、

口悪かけん。」

男の子が私に頭を下げてきた。

宝珠：「ち、違います！？貴方のせいじゃないです！わ、私、いじ  
められてて、学校行つてなくて、それで…、こんな私にでも優しく  
してくれる人がいたんだなあって思つたら、嬉しくて…。」

厘雄：「そつかー。なあんだ。卓のせいじゃなかつたんだあ。良か  
つたねー。」

女の子がそう言つて、男の子の肩を叩いた。

卓：「そ、それより、足、見せてみい。血に出とるとやう？」

男の子が話を逸らすように言った。

私は、おそるおそる足を出した。

厘雄：「うひーー…痛そう…。」

卓：「派手にやつたとやなあー。痛かろ？？」

血が流れて膝は真っ赤…。

痛くないといえば嘘になるけど、はつきり言つて痛すぎて感覚が無  
い。

卓：「何かあれば良いとやけど…。」

男の子がポケットからハンカチを取り出して、私の膝の傷を抑えな  
がら言つた。

厘雄：「はいはーい！厘雄はあ、救急セット持つてまーすーー！」

女の子が手を上げて、得意そうに言つた。

卓：「準備良いとやね。早う貸しんしゃい。」

厘雄：「はーい！」

女の子がカバンから消毒液らしきものと包帯、ガーゼを取り出して、

男子に渡した。

卓：「取り敢えずは応急処置たいね。」

男子は手際良く膝を治療してくれた。

宝珠：「ありがとうございました。何か迷惑かけちゃって。」

厘雄：「ううん。迷惑なんて、そんなこと全然ないよー。だつて友達でしょ？」

女の子の言葉に、私は動搖した。

宝珠：「友達？ 何で？ 私達、会つたばっかりだよ？」

そう私が言つても、女子は笑顔のままこう続けた。

厘雄：「会つたばっかりだつたら友達じゃないの？ そんなこと全然関係無いと思うけどなー。だつてね、優輝が言つてたよ。『人は出会つたその時から友達なんじやよ。』って。」

宝珠：「優輝？ 誰？」

卓：「優輝って言つんは、俺たちが組んだるバンドのリーダーとよ。」

宝珠：「へえ…。 そなんだあ。 すぐ素敵な」と言つ人とやね。 その人。」

そげん人がまだ、この世におつたとやね…。

私はその『優輝』と言う人に会つてみたくなつた。

厘雄：「すつごくカッコE よ。厘雄の憧れの先輩だもん…。」

宝珠：「厘雄ちゃんはその人が大好きとやねえ。」

私がそう言つと、男子が吹き出した。

卓：「ふつ… あははつ… 厘雄ちやんだつてえ！ こいつな、こげん見えるとばつてん男とばい。マジ有り得んたいね。信じられんから

?

「 厄雄は男の子だよ。」

女の子と思っていたその子は女の子ではなかつた。

宝珠：「う、うめん…。美少女クラブとかにいそつた顔だし、声も深夜アーメの萌えキャラみたいな声だし、名前も…。私、女の子と思つてた！！」

厘雄：「いいよー。いつものことだC-!!-ところで自己紹介まだだつたよね。俺、岡本厘雄。厘雄でいいからねー。で、しつちが鐘

法華傳記卷之二

私は軽く会釈した。

厘雄：「ところで宝珠一。宝珠は優輝に会ってみたいない？」

会いたくない訳無い  
この目で確かめたい。

ホントにそんな人がいるのかどうか。

宝珠： 会いたが、 会わしてくれると？」

「優輝に会いたいんだって、宝珠さ、圭雄：うん、いいよー、圭、一緒に行つてもいいでしょ？」

卓：「分かつた分かつた。つて、何で俺に聞くとか！好きにすれば良かやろ？俺に権限無いとやけんね！」

風が止むやうに止むやうに

宝珠：「待つてー。せげんに引つ張りんで良かよ。ちやんと行くけん。」

卓：「そおたい！」いひ、足ばヶガしるとやけん、そげん引つ張つたらまた転んでしまつばい。」

厘雄：「そか、『めん。』」

宝珠：「やだあ、本氣にした？ うそうそ、氣にせんでもよかばい。行こ！」

厘雄：「やつと笑ってくれた。女の子は笑ってる方がずっと魅力的だと思うから、ずっと笑つててほしいなあ… 厘雄は。」

宝珠：「分かつた。じゃあー、厘雄のために、笑つとこうかなあー、私。」

厘雄：「ホント？ やつたね！」

私が望んでた事…。

良いなあ…、私もあんな風に友達と話したりしたいなあ…。

こうして楽しく話して、ちょっと冗談が言える、温かい人間関係が欲しかつた…。

私は、今まで失っていた温かさを感じることが出来た。

## 第2章・温かさ…。（後書き）

次章、遂に主人公の人生を変えてしまうあの人の登場ですーー！

### 第3章・出会い…。（前書き）

公園で出会った少年達に連れて行かれた場所で、主人公は、今まで一番会いたかった人に会うことになつて…。

### 第3章・出会い。

#### 第3章・出会い。

私は、厘雄と卓に連れられて、あるライブハウスに到着した。

宝珠：「ここは…？」

厘雄：「ここ。ここがね、厘雄たちが活動してるトコだよ。」

宝珠：「そうなんだー。」

厘雄：「うん。入つて入つてー。」

厘雄がドアを開けて、勢い良く手を振る。

厘雄：「優輝ーい！ただいまー。」

優輝：「おお、厘雄、早かったのう。もうひとつと遊んできても良かったとよー。」

『優輝』と呼ばれた人の声が奥の方から聞こえてくる。

厘雄：「優輝ーい！聞いて聞いてえ。今日ね、お密さん連れてきたのー！」

優輝：「お密さん？？」

そして、その『優輝』という人が奥から出てきた。

厘雄：「宝珠つて言つのー。」

優輝：「そうね。じゃ、自己紹介とかんといかんのう。俺は、永星優輝。しくみ。高2じゃけん、多分年以上じゃと思つたけど、優輝でいいぜよ。」

そう言つて、その人が左手を差し出す。

宝珠：「は、はじめてー！四王寺宝珠です。中2です。よろしくお願いします。」

私も左腕を差し出して握手をする。

優輝：「まあ、何もないところがんど、ぬつくりしていつて。」  
二口つと笑うその優しい笑顔は、私の心の傷を一瞬にしてかき消した。

優輝：「何か飲むか？何が良かと？」

宝珠：「い、いえ…そんな、お構いなく。」

優輝：「そんな遠慮せんでも良かじやろ？友達なんじやけんが、何をそんなに遠慮する理由があるんよ。」

厘雄の言つとおりだ…。

この人は、初対面の私を友達だつて思つてゐ…。

宝珠：「い、ごめんなさい…。」

優輝：「別に気にせんで良かよ。それから、その敬語止めるんしゃい。俺は敬語つち嫌いなんよ。じやけ、正式な場所以外は絶対俺使わんばい。」

厘雄：「そつだよー。敬語なんか止めちやえー。」

厘雄が、オレンジジュースを両手に持つて來た。

厘雄：「宝珠が遠慮するから、勝手に厘雄の好みでオレンジジュースにした。」

優輝：「ほらあ、宝珠がちゃんと言わんと、お互に気に使わんといかんくなるじやろ？だけん、いらん氣使わんでいいんぜよ。他で使わんといかんとしても、いじでは使わんでいいこと。OK？」

気持ちは嬉しかつた…。

けど…こういう言葉、何度も言われたことある…。

宝珠：「で、でも…私…。」

卓：「何でそうやつて、自分から殻ん中入るうとするよ。学校で何があつたが知らんばつてん、いじでは誰もお前ん事苛めたり責めたりせんから大丈夫たい。」

卓の言葉が私の心に突き刺さつた。

私は、やつぱり心のどこかで厘雄たちを信用していなかつたんだ…。そんな自分が情けなかつた。

こんなにも優しく接してくれる人たちまでも、いつの間にか信じることが出来なくなつっていた自分…。最低だよ…。

優輝：「あのや、もし宝珠の心が許せばでいいんじやが、溜まつと

おモン出してくれんかのう？俺に全部話してほしいんじや。話すのが無理じゃつたら、俺をその相手じやつて思つて、そのまま言つたいことぶつけてみんしゃい。」

厘雄：「やうだよ。言つちやいなよ。樂になると思つよ。厘雄たち、宝珠の味方だから！」

みんなの言葉に、今まで溜まつていたものが一気に湧き出でてきた。  
宝珠：「…なん…で…、何で！何でえ…。何で私ばかりこんな目に遭わなきやいけないの！？私…何かした？何でこんなに苛められなきやいけないの！？もう行きたくない！学校なんか！死んじやいたい…。もう耐えられないの！もう無理なの…」

そう喚いた瞬間、優輝に抱きしめられた。

宝珠：「ゆう…き…？」

優輝：「よお勇氣出して言つてくれたの…。残念じやが、お前の学校まで踏み入つてそいつらに文句を言いに行くことはできん。じやが、ちゃんとお前の思い、辛さ、悲しさは俺には伝わつたけん。もう大丈夫ぜよ。ここにおれば、お前のことを苛めたりする奴は絶対におらんよ。約束するたに。」

優輝の温もりが切なくて、苦しくて、でも嬉しくて…。

私はもうみんなが見ていることなんて忘れて泣いていた。

優輝：「辛かったの…よお我慢した…。ええよ。泣きたい時は泣きたいだけ泣きんしゃい…。」

私は幸せだと思つ…。

こんなにも私のことを理解してくれる人がいて、受け入れてくれる人がいて…。

私は、この出会いで、自分は幸せだと感じることが出来た気がする

…。

### 第3章・出会い…。（後書き）

次章は、主人公がみんなの仲間入りをしますーー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1190d/>

---

私がDJになる時

2010年11月27日20時37分発行